



うま
「美し国おこし・三重」の取組について

有限会社 Landa Associates

(宮本倫明／寺内浩司／志村和浩)

平成22年1月22日

取組のめざすところ

「文化力」を生かした自立・持続可能な地域づくり

今、私たちは多くの課題に直面しています。

人口減少社会の中で、より効率的な地域経営が求められる一方で、価値観やライフスタイルの多様化に対する対応、過疎・高齢化などによるコミュニティの機能弱体化への対応など、三重県内でも地域固有の課題が数多く存在します。また、世界に目を向けると、グローバル化の進展による地球規模での経済競争の激化や環境問題の深刻化など日々の世界状況の変化も、私たちの暮らす地域にとって決して無縁ではありません。

時代は大きな転換期を迎えています。

地域間格差の是正や社会システムの変革など、一見、市町や県レベルの取組だけではどうにもならないと思えることもあるかもしれません。しかしながら、地域を担う人びとがこの国を担うという原点に立ち返る必要があります。地域をより良くしていこうという動きが、市町や県、国をより良くしていこうとする動きそのものにつながります。この当たり前の事実をひとつひとつ実践していこう、とする試みが「^{うま}美し国おこし・三重」です。

三重は海や山の豊かな自然に恵まれ、人が暮らすのに理想的な地域として、古くから「^{うま}美し国」と呼ばれてきました。「おかげさま」という端的な言葉で自然の恵みや近隣の人びとに感謝の気持ちを伝え継いできた人びと。まさに三重は、人と人、人と地域、人と自然の“絆”が保たれてきた地であるといえます。これまで経済性や効率性を求めすぎた結果、薄れつつあるさまざまな“絆”を今一度、紡ぎ直すことで、人と人、人と地域、人と自然の“絆”を取り戻し、さまざまな課題に自らが取組むことで、住む人も訪れる人も、本当の“豊かさ”や“しあわせ”を感じることができる地域社会を築いていきたいと考えています。

取組の構成

構成① 地域での^{うま}美し国おこし

地域について学び、地域の課題や将来を語る場を設け、“絆”を深める取組や地域の資源を生かした取組を進め、地域の魅力や価値を高めていきます。

構成② テーマに基づき全県的に取り組む^{うま}美し国おこし

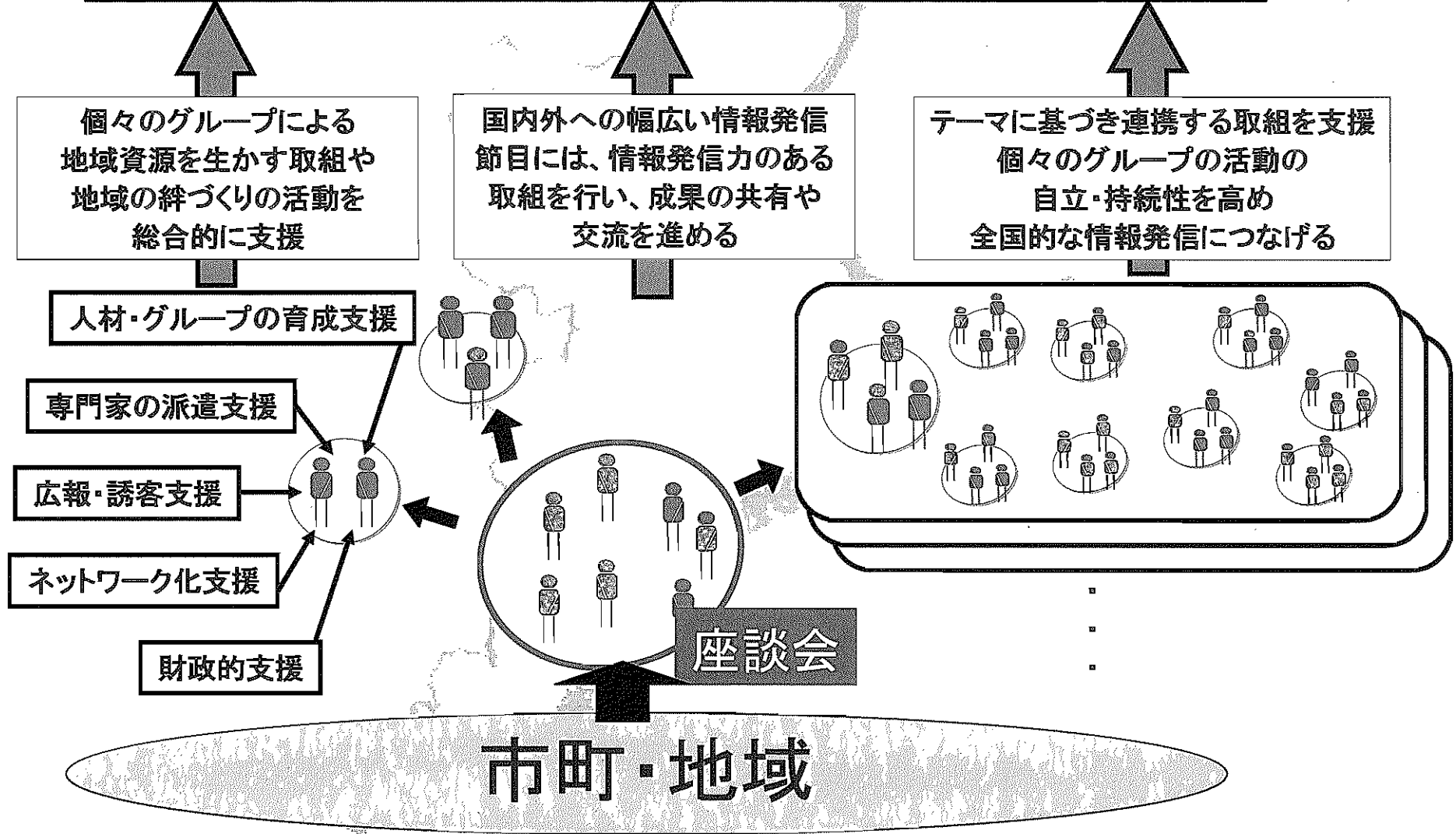
地域での「美し国おこし・三重」での取組の中から、例えば、景観づくり、森づくり、環境、食といったいくつかの共通する分野のテーマを選定し、生活の質を高め、本物をめざす取組をテーマごとに全県的に進めていきます。

構成③ 節目に行なう効果的な情報発信

^{うま}「美し国おこし・三重」の期間をとおして、一連の取組を広く国内外に情報発信していきます。また、期間中の節目には、「オープニング」や「集大成イベント」などを行うことにより、情報発信力のある取組とし、成果の共有や交流を進め、自立・持続可能な地域づくりを加速させていきます。

取組の進め方

「文化力」を生かした自立・持続可能な地域づくり



今年度の取組状況

(数値は平成21年12月末現在)

① 座談会等の開催

◇483回(座談会73回／個別座談会346回／説明会等64回)

② パートナーグループの登録

◇124グループ

③ 育成と支援

◇ファシリテーション研修(津、四日市、伊勢で開催。52名参加)

◇広報・情報発信研修(桑名、尾鷲、伊賀で開催。51名参加)

◇ネットワーク化支援

◇専門家派遣支援(3件)

◇財政的支援(4グループ)

④ 「^{うま}美し国おこし・三重」オープニング

◇市町での拡大座談会

◇「対話する」大会

◇キックオフプロジェクト

◇大規模イベントとの連携

現時点での成果

① パートナーグループの活動の充実・発展

◇地域をより良くしようとする住民の皆さんによるパートナーグループ登録数124

(平成21年12月末現在)

◇対話を通じて、活動の方向性が明確になってきた

◇情報の提供、専門家の派遣を通じて具体的目標が明確になった

◇ネットワークの構築で活動が広がってきた

② パートナーグループ同士の連携

◇市町をまたいだ連携(例:尾鷲市と紀北町の連携、など)

◇活動領域をまたいだ連携(例:三重・とらいあんぐる、など)

◇活動テーマによる連携(例:「医食同源」「竹の有効活用」、など)

③ 担い手の育成支援

◇ファシリテーション研修(今後の活動に生かせそうか?⇒はい100%)

◇広報・情報発信研修(県内の講師による実施で、事後の相談もできると好評)

④ 企業などの協賛

◇アサヒビール(株)、アインズ(株)

◇「^{うま}美し国おこし・三重」サポーターズクラブ発足

⑤ 「^{うま}美し国おこし・三重」の取組の認知向上

◇内容を知っている 21% (4/18-19) ⇒33.1% (11/14-15)

パートナーグループ「三重・とらいあんぐる」が中心となって実施した、第一回「三重の物産展」(4/18・19)、第2回「三重の物産展&道の駅フェスティバル」(11/14・15)における四日市一番街商店街にて定点調査。

来年度以降の取組

構成① 地域での^{うま}美し国おこし

- ◇平成21年度に引き続き、座談会等の開催を通じて、パートナーグループの発掘や活動を支援
- ◇活動の自立・持続性を高めるための、助言、情報提供、専門家派遣、ネットワークづくり、広報・誘客支援、財政的支援の実施

構成② テーマに基づき全県的に取り組む^{うま}美し国おこし

- ◇平成22-23年度のテーマに基づき、関連するパートナーグループ同士が連携し取り組む「テーマプロジェクト」の展開
- ◇企業、団体等の「テーマプロジェクト」への参画促進

構成③ 節目に行なう効果的な情報発信

- ◇「テーマプロジェクト」の過程や成果の効果的な情報発信
- ◇パートナーグループ同士の連携による有機的な情報発信

今後の取組に対する課題

① テーマプロジェクトのとりまとめ

- ◇多様な「テーマプロジェクト」を実現するために、パートナーグループ間での「事務局機能」「プロデュース機能」の発揮
- ◇企業、団体等との協賛、協力依頼

② パートナーグループのフォロー

- ◇「地域担当プロデューサー」機能の補完体制

③ 積極的な広報・アピール活動

- ◇パートナーグループの告知情報の迅速なアピール(ネットの活用)
- ◇マスコミ媒体各社との関係構築

④ 戦略的な連携づくり

- ◇実行委員会構成主体との連携
- ◇県庁他部局との連携(情報/事業)
- ◇県内企業との連携(テーマプロジェクトへの参画)
- ◇既存グループとの連携(中間支援組織、テーマの分野における先進グループ)

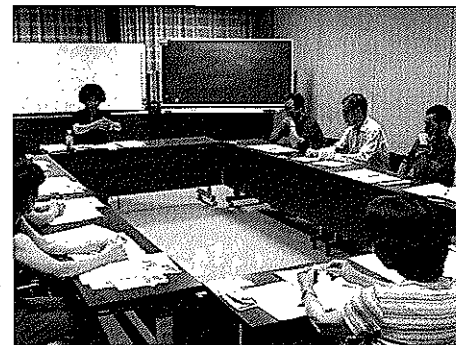
座談会・パートナーグループについて事例報告(県北部)

○座談会・意見交換会等

新たな活動グループの創出

事例1:木曾岬町公募型座談会 <木曾岬町>
平成21年7月から

参加者同士の趣味の話をきっかけに、米粉と天然酵母と地元産トマトを使った「木曾岬ピザ」の開発で話が盛り上がり、「ごたーげさん」というグループが立ち上がった。



木曾岬町公募型座談会

近隣地域の連携づくり

事例2:桑名市・木曾岬町合同拡大座談会 <桑名市>
平成21年11月22日

桑名市、木曾岬町との連携のもと「新たなつながりづくり」を目的に拡大座談会(ワールドカフェ方式)を開催。登録済のPG活動報告や同じテーブル内で協力し合える可能性についての対話から連携のきっかけを創出。お互いが直接、連絡先を交換するなどの姿も見られた。



桑名市・木曾岬町合同拡大座談会

座談会・パートナーグループについて事例報告(県北部)

○パートナーグループの活動

座談会から始まった新しい取組

事例1:ごたーげさん <木曾岬町>

受け継がれてきた木曾岬ならではの郷土料理や木曾岬町の特産物を使った新たなレシピづくりを行うとともに、田畑を地域の集いの場と見立て、料理を通じた世代間交流を行い、町おこしを展開していく。

事例2:三重・とらいあんぐる <四日市市>

既存のNPO 2団体と地元商店街で「地産地消」「商店街活性化」「福祉のまちづくり」の複合テーマで連携し新たなグループを結成。釜焼きトンカツやハム・ソーセージづくりで中心市街地に障がい者の雇用創出の場づくりをめざして活動している。

事例3:ぽっかぽかの会 <亀山市>

障がい児を持つ母親や当事者がカフェの開業を目指して取り組んでいる。昨年11月には市内の農産物を素材に東京の出張調理専門家チームとメニュー開発や調理実習を実施し、市内のイベントにて有料販売し好評を得た。

事例4:太陽と風の道づくり <津市>

美杉町太郎生地域を通る「太陽の道(レイライン)」に重なる池の平湿原の回復を通じて都市との交流を進めていく。



「ごたーげさん」米粉ピザ試作



「三重・とらいあんぐる」
第2回「三重の物産展&道の駅フェスティバル」

座談会・パートナーグループについて事例報告(県北部)

○パートナーグループの活動

既存の活動のステップアップをめざす取組

事例5:桑名の千羽鶴を広める会 <桑名市>

子供たちへの出前講座や桑名の千羽鶴を国際貢献に役立てようと、外国語での情報発信や在日外国人とのネットワーク化をめざしている。

事例6:まるごと四日市地域ブランド <四日市市>

市内で従事するプロの料理人有志が、環境や品質に優れた市内の生産者との提携関係を築きながら料理を提供していける仕組みづくりに励んでいる。

事例7:亀山食の祭典部会 <亀山市>

亀山市自治会連合会によって昨年からの取り組みがスタート。食を通しての地域活性化をめざすことを目的にしたイベント「食の祭典」を開催し、亀山のグルメを創出するきっかけを提供している。

事例8:特定非営利活動法人 ユニバーサルデザイン同夢 <伊賀市>

すべての人が共に支え合って暮らすことのできるユニバーサルデザインのまちづくりをめざす活動で培ったノウハウを、各種の団体が開催する「イベント」の運営に活かすことにより、地域社会に貢献していく。



「桑名の千羽鶴を広める会」
スペインの報道写真家による活動取材



「亀山食の祭典」会場風景

座談会・パートナーグループについて事例報告(県北部)

○その他

パートナーグループによる、新しい中間支援活動のはじまり。

事例1 みえの食と産業推進協議会<四日市市>

プロの調理師組織として、地域の食材を活用した製菓中心のレシピを開発し、地域活性に励む各種グループに無償提供を行う。

活動実績:平成21年9月26・27日に開催された伊勢湾台風50年事業(輪中の郷・輪中ドーム)で木曾岬産トマトを素材にしたパウンドケーキを限定販売。

事例2 三重の文化力 放送パートナーズ<津市>

情報発信の中間支援活動として、県内グループが取り組んでいる日々の社会活動や所持している情報、技術などを映像と音声によって携帯端末(携帯電話等)やパソコンへの動画配信で広く国内外に発信を行う。



「伊勢湾台風50年事業」会場風景と木曾岬産トマトを素材にしたパウンドケーキ

パートナーグループ支援の具体的な流れ(県北部)

◇ぽっかぽかの会 <亀山市>

障がい者が働く喫茶店をつくり、障がい者が社会と繋がる場を提供するとともに、その保護者も含めて情報交換が行える場をつくっていくことをめざす。

- 6月上旬 座談会 障がい者の保護者のグループが、障がい者も健常者もへだてなく集まれるカフェづくりを検討する中で、目玉となるメニューについて、鹿伏兎(かぶと)山脈自然薯の会との合同座談会を開催。自然薯の活用について、協力連携の方向を検討することになる。
- 6月下旬 個別座談会 オリジナルメニューを開発し、近隣のイベント等で実験的に出店を試みつつ、カフェの現実化をめざすグループの意思が固まり、パートナーグループ登録へと進む。
※ その後、地元の農産品活用と障がい者の雇用促進に向けた取組みモデルとしてキックオフプロジェクトに認定される。
- 11月上旬 合同座談会 同じ市内のパートナーグループである「亀山食の祭典部会」と、イベント連携に向けた詳細打ち合わせを行う。
- 11月下旬 地域の食材を活用した現代風の料理を創作する、東京の出張調理専門家チームの派遣により、自然薯を活用したジェラートやスープなど、亀山産の農産品を活用したレシピを開発。「亀山食の祭典」で有料販売し完売。レシピはグループに引き継がれた。
- 12月中旬 障がい者就労支援、関連法の専門家派遣により、障がい者雇用の施策や実例について学ぶ。
- 今後の予定
 - ・自然薯ジェラートの試作(専門家との販売戦略を相談)
 - ・試作販売(2/28、4/4)
 - ・3月に専門家派遣を予定
 - ・法人化の検討(LLC/LLP/NPO)、作業場の確保、福祉事業申請
 - ・カフェの開設

自立・持続可能な取組へ



「ぽっかぽかの会」活動風景

座談会・パートナーグループについて事例報告(県南部)

○座談会・意見交換会等

市町間のネットワークづくり

事例1:尾鷲市・紀北町のパートナーグループ連携

尾鷲市・紀北町との連携のもと、パートナーグループの交流を推進。11月29日には、「地域のネットワークづくり」をテーマに紀北町にて拡大座談会を開催。今後は、東紀州地域での対話する大会を開催し、交流・連携を進めていく。



11月29日 尾鷲市・紀北町拡大座談会

尾鷲市・紀北町合同座談会実績:平成21年11月6日「葉っぱがドクター・奥川ファーム」

平成21年11月29日尾鷲市・紀北町拡大座談会

平成22年1月13日「特定非営利活動法人ア・ピース・オブ・コスモス、葉っぱがドクター、Hinokku」

「対話する」大会尾鷲会場:東紀州地域のパートナーグループを中心に他地域のグループや住民との交流を目的に開催予定(2月14日)

サマーキャンプなど新しい集客の仕組み

事例2:NISSYU PLANT <登録手続き中>

伊勢市のNISSYU PLANT(サッカーを通じて地域の絆を深めていくことをめざすグループ)とジュニアサッカーチームの東紀州地域での合宿(民泊・職業体験)を計画。現在、東紀州地域での受け入れパートナーグループなどの調整を行っている。



「特定非営利活動法人ア・ピース・オブ・コスモス」「葉っぱがドクター」「Hinokku」合同座談会

県南部地域にて、サマーキャンプなど新しい集客コンテンツの実現に向けてのモデルキャンプを想定。

座談会・パートナーグループについて事例報告(県南部)

○パートナーグループの活動

座談会から始まった新しい取組

事例1:里山食塾 しえあわせ <玉城町>

畑付きの里山古民家「鶯櫻庵(おうおうあん)」を中心に、食農教育を通じて子どもたちに体験型の食育を行うとともに、日本古来の知恵や日本の文化を正しく伝承する自然塾を開催する。

事例2:Hinokku(ひのっく) <尾鷲市>

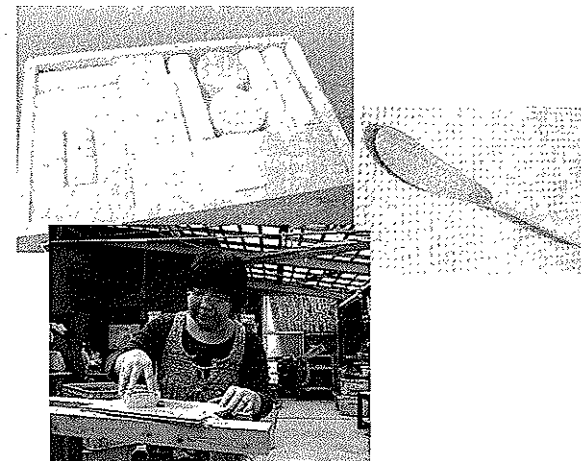
尾鷲ヒノキの間伐材や端材を使って木工品を作ったり、木工教室を開催することにより、木の魅力を発信するとともに、環境保全教育や森づくりにつながる取組を行っていく。

事例3:海守り <紀北町>

磯焼け対策として、藻場再生をおこなうグループ。島勝の海岸に海のピオトップづくり活動を開始した。

事例4:紀宝楽居 <紀宝町>

高齢者の雇用創設を目的に、野菜(らっきょ)作りをビジネス化し、紀宝町の特産品化をめざすとともに、地元の畜産肥料を使用するなど、地域のお産業と連携し、地域活性化に取り組んでいく。



「Hinokku」製作風景と作品



「海守り」子供たちによる伊勢エビ放流イベント

座談会・パートナーグループについて事例報告(県南部)

○パートナーグループの活動

既存の活動のステップアップをめざす取組

事例5:たき環境くらぶ“竹遊号” <多気町>

住民で整備した公園「クリスタルの森」を拠点に、住民、企業、学校、各種団体等が協力してこの公園を管理するとともに、公園を活用した環境活動を展開し、環境による地域づくりを進める。

事例6:三重県伊勢調理師協会 薬草料理研究委員会 <伊勢市>

日本人の「こころのふるさと伊勢」において、東洋医学の「医食同源」の理の基に、疲労回復・滋養強壮等に良いとされる天然資源の薬草・海藻等を数多く使用し、「食養」を旨とした献立づくりを行う。「伊勢に来て心も体も健康になろう」をスローガンに、誘客に結び付けていく。

事例7:鳥羽まちなみ水族館 <鳥羽市>

「数ある観光地の中から鳥羽を選んでいただきありがとうございます」との気持ちを「おもてなし」という形で表し、環境問題を考えながら、子どもたちと一緒に流木等の海のゴミを活用した海の生き物の作品づくりと展示を行っていく。

事例8:アクティブファーマーズ <紀宝町>

農業従事者の高齢化や後継者不足などの解決の一助となるような地域づくりに貢献する活動に取り組む。



「たき環境くらぶ“竹遊号”」活動風景



「アクティブファーマーズ」研修風景

座談会・パートナーグループについて事例報告(県南部)

○その他:

パートナーグループによる、新しい中間支援活動のはじまり。

事例1:三重を元気にしよう会 <志摩市>

チラシ・パンフレットなどのデザイン協力やインターネットでの広報情報発信協力、チケット販売協力、事業計画策定協力などによるパートナーグループへの支援を行なっている。

活動実績:平成21年10月16日「アクティブファーマーズ」の座談会において、「三重を元気にしよう会」がオブザーバーとして参加。



「アクティブファーマーズ(三重を元気にしよう会オブザーバー参加)」座談会風景

事例2:美し国ツアーズ <玉城町>

旅行業の資格を生かし、全県のパートナーグループの交流ツアーを実施予定。パートナーグループの交流促進・ネットワーク支援を行う。最終的にはパートナーグループへ送客できる着地型旅行エージェントをめざしている。

活動実績:平成21年12月12日、第一回交流ツアー実施、参加者15名。受け入れパートナーグループ:「古道魚まち歩観会」「手作り工房・ワーイワイ」「奥川ファーム」<紀北町>「葉っぱがドクター」<尾鷲市>「木本古道通りの会」<熊野市>「アクティブファーマーズ」<紀宝町>
平成22年は3ヶ月～4ヶ月に1回程度の間隔で実施予定。



「美し国ツアーズ」第一回交流ツアー



パートナーグループ支援の具体的な流れ(県南部)

◇参宮ブランド『擬革紙』の会 <玉城町>

江戸時代から昭和初期まで、伊勢地方一円で生産されていた「擬革紙」の復興を通して、文化的に高く評価されてきたこの地方のかつての工業技術力の証として、また、文化力立県のシンボルのひとつとして、広く情報発信していくことをめざす。

- 4月中旬 座談会(2回目) 意見交換の中で、三忠(旧擬革紙メーカー:明和町、町かど博物館)の協力を得て、かつて伊勢参拝の土産として人気を博した擬革紙を当時の技術で復興させようとの機運が高まる。
- 5月下旬 個別座談会 個別座談会を通して、現実化への意思が固まり、活動のステップが話し合わせ、パートナーグループ登録の準備を進める。
- 6月下旬 パートナーグループ登録 擬革紙の復興は、全国的にも発信力があり、地域の活性化につながる取組として期待されることから、グループ登録される。
- 7月初旬 キックオフプロジェクトに認定 失われた文化の復活、地域ブランド開発、産業振興など、多分野連携モデル、情報発信モデルの取組として採択される。

以降、擬革紙の復興に向け取組を進めている

- 8月~11月 歴史的背景調査の実施や昔ながらの手法で柿渋を作る『度会Cb(シブ)倶楽部』と連携。和紙の産地の紹介や型紙に塗布する柿渋の調査を実施した。
- 12月上旬 製作機械を拠点となる玉城町内の施設に搬入し、接着糊の実験、試作を始めた。
- 今後の予定 高知県立紙産業技術センターにおいて、当時の『擬革紙』の成分分析実施する。



「参宮ブランド『擬革紙』の会」活動風景と擬革紙のたばこ入れ

自立・持続可能な取組へ